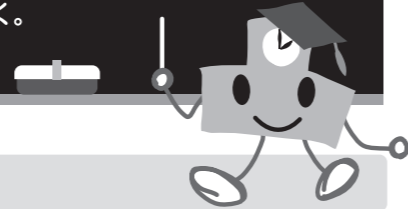


小学校の事例 北区 白楊小学校

子供たちが日常的に植物や昆虫に触れる。観察や実験から、食物連鎖や環境を学ぶ。

都心の学校のためビオトープをつくり、環境への意識を高める工夫を。多様な生物の生息を観察することで命のつながりを学ぶ。これからは自然保護の必要性や環境配慮につなげていく。



内容 顕微鏡でプランクトンを観察

本校は都心に近いため、校区内に自然が少ない。学校のまわりに木を残していきたいということで、平成16年、環境局による学校ビオトープモデル整備校に応募した。現在、ビオトープにはナナカマド、エゾマツ、カエデ、クリ、ツツジなどの樹木、フッキソウ、ササなどを植えている。児童はこれらの木々への興味に加え、雨が降った時にできる、水たまりに泳ぐアメンボなどの昆虫にも興味をもっているようすである。

本校の児童はビオトープの周辺で遊びながら、植物や生物を観察している。低・中学年では、木から落ちた実や落ち葉などを集め、図工の時間に作品の素材として使用している。

平成21年は「理科支援員」(北海道大学の先生)が来校し、「生き物どうしの関わり」と題して、子供たちとともにビオトープに生息する生物を観察した。ビーカーにビオトープの水を採取してコーヒーフィルターでろ過し、顕微鏡を使って動物プランクトンや植物プランクトンを観察。死骸・細菌・分解についても学んだ。また、ビオトープから採取した微生物を寒天培地で培養する実験も行った。

この観察や実験を通して、食物連鎖を学習することで、子供たちは水や二酸化炭素の循環について大まかに捉え、ビオトープの環境や生物に対して新たな見方や考え方ができるようになった。



ビオトープの池に咲いた蓮の花



草木が生い茂っている

今後 観察を重ねて 疑問を探求する

ビオトープを利用した観察を終えると、子供たちから「死骸だらけにならないようにするには酸素が必要」「落ち葉に注目して観察してみたい」など、様々な疑問や感想が生まれていた。これをきっかけとして、自然環境への興味から、自然環境保護の必要性や環境に配慮した行動の指導へとつなげていきたい。

これからもビオトープが身近な存在であり、さらに子供たちの目線で観察を重ね、疑問を解決し発展させられる素材になっていこう。



アカゲラなど小動物も遊びに来る



秋には栗の実がたくさん



冬のビオトープ

広げよう
つなげよう
環境学習の輪



実施校から
メッセージ

子供たちの意識は高まってきています。本当はさらに環境をきっかけとして、エネルギーや食糧、水、人口…といった世界をとりまく現状とその問題を冷静に考えていける子どもを育てていきたいところです。そのためには、しがらみや利害をはなれた見方が必要だと思います。